
R o a d t o H e a v e n

カータ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R o a d t o H e a v e n

【NZード】

N 7 9 1 5 A

【作者名】

カータ

【あらすじ】

一枚のコインで繋がれた思いと思い。ちよっぴり切ない感動ストーリー。

その日はいつも通り、会社からの帰路に着いた。
車から眺めた空は夕焼けで真っ赤な空だった。
見ていると心が癒される。

昔から空を見ることが好きだった自分。

「きれいだな・・・。」

いつの間にか忘れてた。

いつだつただるう・・・。

空を見なくなつたのは・・・。

忙しさに追われ、どこかに心を置いてきた。
そんな気がした。

いつも通り、いつもと変わらない

部屋に入る。仕事着を脱ぎ、鞄を置き。

元気よく出迎えてくれるアイツが挨拶をねだる。

「ねずみじへ部屋にいるんだな。」

いつもは下のリビングにいるはずのアイツ。
頭を撫でてやると勢いよくしつぽを振った。

「・う・よ・・よしよし。腹減ったか?」

なめられた顔を腕で拭う。
皿を用意して、えさを入れた。

田の前に皿を置いてやると・・・

『・・・クウ~』

なにか意味ありげにこつちを見つめ
手をつけようとしない。

「ん・・なんだ食べないのか?」

「・・ふう」ため息。

仕事の疲労が眠気を誘う。

「疲れた・・・早いけど寝るかな。」

飯や風田も済まさないうちに布団にもぐつた。
うとうとしながら、アイツのほうを見ると・・・
まだ、ごはんの前に座つて睨めつこしている。
でも、アイツが見てくるのはごはんではなかつた。

その田線の先にあつたのは一枚のコインだった。

「あれ・・・あのコインは?」

どこか見覚えのあるコイン。

気になつて、眠氣を堪えて布団から起き上がる。

眠たい目を擦り、コインを手に取った。

「はあ～」大きな欠伸^{あくび}がひとつ。

「これは・・・んー・・・。」

「あ、そうだ。確かにこのコインは・・・パルの。」

「なつかしいな　。」

このコインはちょうどアイツがやつてきたときだ。
そうアイツとはパルのこと。

パルとはパピヨンという種類の小型犬で
蝶々みみたいな形をした耳が特徴だ。

もう今年で6歳になる。

6歳といつても子犬のときから飼つてはいなかつた。
友人の頼みで引き取つたのである。

今年でこの家に来て3年が経つ　。

それはパルが家に来てはじめて散歩しようと
準備をしていたときだつた。

俺の彼女がおもしろ半分でパルに
コインのネックレスをつけたのがはじまりだつた。

犬にネックレスなんてと思っていたが・・・
パルはそんな俺の気も知らずに

それを気に入つたらしく、パルは肌身離さず
そのコインをはずすことはなかつた　。

それからじょじょに月日が流れ。

パルと俺が散歩をしている時だった。

いつもの道、いつもの公園で休む。

なにも変わり映えのない日常。

帰り道、その平穏を破るかのように大きな音が響き渡る。

『・・・ギギギギ・・・』耳に突き刺さるようなブレー キ音。

その瞬間・・・意識がなかつた。

「痛う・・・」

田を見ましたのは病院のベッドの上だった。
朦朧もうろうとする意識の中、記憶を探る。

だが、さっぱりわからなかつた。

自分がここにいること、そしてなぜ足が包帯でぐるぐる巻きにされ
ているのか・・・

しばらくすると医者らしき人がやつて来て、事情を説明してくれた。

どうやら、俺は車にはねられたらしい・・・

運転手が酒を飲んで、歩道につっ込んだときに俺がはねられた。
傷は足の骨折で済んだ。

「あー、パルはー?」一緒に散歩をしていたパルが心配だ。

「パル！？ああ、一緒にいた犬だね。ここは病院だからね。あの子には外で待つてもらつてるよ。」

「ケガもないから安心しなさい・・・。」と医者が答えた。

よかつた。

「そうそう。あの子には感謝しといたほうがいいよ。それじゃ私はこれで失礼するね。」

なにか意味ありげな言葉を残して去つていった。

パルに感謝？なんだらう・・・。

それから数日が経つて退院するとき。

看護婦さんがパルについて話してくれた。

あの事故のとき、俺が足の骨折だけで済んだのはパルのおかげだった。

後ろから車がつっ込んできたとき、パルが首に繫がれてるロープを引っ張った

おかげで運よく重症にならなくて済んだみたいだ。

俺を運んでくれた人が言つていたらしく、あの犬があのとき引っ張つていなかつたら、今頃・・・無事じやなかつたね。

偶然とも思つたが・・・。

迎えに来た彼女に抱かれているパルの首にはコインがなかつた・・・。

大切だつたコイン。

ただ、それを見ただけで胸が熱くなつた。

偶然でも、自分が救われたことに変わりはないのだから・・・。

あれ、なんでこんなこと思い出してるんだっけ・・・。

。

隣に暖かな感触がある。

いつもは暑く感じるのに今日は心地よかつた・・・。

「んん・・・朝か。」ふと目が覚める。
いつの間に寝たんだ。

ボーッとした頭を起し洗面所へ行く。
顔を洗い、いつものようにパルを呼ぶ。

「パルーー」はんだよ。

いつもなら飛んでくるアイツが来ない・・・。
何度呼んでも反応がない。

不安になり下のリビングへ行ってみることにした。

いつも仕事へ行くときは下のリビングにいる親へパルを預けて行く。

だから、ここにいるはずだ・・・。

なぜだろう胸騒ぎがする。

早足で階段を下りた。

母にパルのことを尋ねると・・・少しうつむき重い口を開いた。

「パルは・・・昨日事故で・・・。」

その言葉を聞いたとき・・・その先の言葉がわかつてしまつた。
受け入れがたい・・・とても・・・信じたくない言葉。

涙は不思議と出なかつた。

2階の部屋へ戻ると、ふと疑問に思つた。

あれ昨日は確かにパルは・・・。

ああ・・・そつか・・・最後の挨拶だつたんだね。

エサの皿を見るとそこにはコインが入つていた。

・・・コイン。

自然と涙があふれた。

言葉が出ない・・・いろいろな思いが込み上げてくる。
情けない自分に・・・。

まともに相手をしてやれなかつた自分に・・・。

ただただ涙を流すしかなかつた。

数日後

落ち込んでる俺に彼女は言った。
パルはきっと天国で幸せにしてるよ。

ビツして…と俺が聞き返すと彼女は…

コインを手に取り、俺に見せた。

『ほら、I'm on the road to Heavenって書いてるでしょ』

『そして裏にはね…』

バルが本当に言いたかったのはこれだった。

そして、心配しなくていいよって…。

きっと、あいつはわかつてたんだな。

自分が死んだら、俺が自分のせいにしてしまうことを…。

そのとき、はじめてバルの気持ちがわかつたのかもしれない。

『コインの裏にはHappyの文字』が輝いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7915a/>

R o a d t o H e a v e n

2010年12月25日14時34分発行